

退できませんでした。B29の大艦隊は約2時間半にわたり、上野、浅草、本所、深川など隅田川を挟んだ東京の下町一帯に大量の焼夷弾を投下しました。

火の海から逃れるため、女性や子どもが我々の陣地に「丘隊さん助けてー」と悲鳴を上げて来ましたが、任務を優先しなければならず、誰一人助けることができませんでした。まさに地獄とばかりのことが。そう思いました。

高射砲陣地も焼かれ、自分の服に燃え移る火の粉を打ち消すことが精いっぱい。軍人の本分をなせば、何か思に残すことはなにかと目をつめたその時。遠くからかすかに聞こえた中隊長の「全員退避」の声。場所は深川の川の中と言われ、夢中で川へ飛び込み、命拾いました。

夜が明けて、仲間達の顔を見るたびに顔が真っ黒。誰だか分からない。辺りを真澄すと焼死体の山がありました。

戦争は絶対にやっつてはならない。（聞き手・山本雄太）

広島と長崎に原爆が投下され、終戦を迎えたあの夏から80年。戦争の時代を生きた人は年々減り、当事者の声を聞ける機会は少なくなってきた。長野日報社では、戦争の悲惨と平和の尊さを改めて考えるとともに、戦争の記憶を次世代に継承していくため、若手・中堅記者が諏訪、上伊那地方に住む戦争体験者6人に話を聞いた。